シネマ女性学

白樺に囲まれた古い家で

松本 侑壬子・ジャーナリスト

フィンランドは、日本からわずか10時間の、1番近いヨーロッパの国だとか。しかし、この映画では、初めはやっぱり風土といい宗教といい、人間の体格風貌といい、とてもそうは思えない遠い国だ。それが、最後には主人公と共に、切なさも明日への希望をもしみじみと分かちあう気持になる。登場人物が男女たった3人の、神話のようにシンプルで、しかも揺るぎない人間ドラマである。

1970年代のフィンランドの片田舎。水辺と木立と草原の彼方から、短い髪にジャケット姿の、ちょっと目には男か女かわからないような体格のよい女性（だった！）がやって来る。大きめのトランク1つを手に、硬い表情でたどり着いたのは、まるで掘立小屋のような古い牧師館。

ぶすっとしたままの来客の名はレイラ。12年間の刑務所暮らしを終えて、その足でここへやって来た。奥からそろそろと出てきたのは老いたヤコブ牧師。青い目を見開いているが、盲目である。長患いの一人暮らしで、もうミサに来る信者もいないが、今では毎日郵便配達人が届けてくれるさまざまな人からの相談の手紙に返事をすることが生き甲斐である。もちろん、自分では読めないので、誰かに読み上げてもらい、自分の言葉を書きとって返事を書いてもらいたい。それが、牧師がレイラの身元引き受け人になった理由だった。

温かく迎える牧師に「2, 3日で出ますから」とまるでやる気のないレイラ。だが、手紙は毎日届くので、ともあれ仕事はやらねばならない。レイラは郵便配達人とも険悪な関係になり、時には受け取った手紙を勝手に捨ててしまったりもする。が、庭の白樺の木の下でレイラの読み上げる手紙の主に、何とか力になりたいと誠心誠意、考え、祈り、意を尽くそうと努める牧師。手紙は、年齢・性別にかかわりなく、心の支えを求めて全国から届く。一度きりのものも何度も来るものもあるが、牧師にとってこの上ない楽しみとなっていた。

だが、ある日、毎日届いていた手紙がぱたりと止まる。動揺を隠しながら、不安に駆られる牧師。ついに自分は人に必要とされなくなるときが来たのか、と。一方レイラは、ついに牧師の元から自由になって出て行く決心をするが、いざ荷物をまとめてみると、自分には行く先などどこにもない。絶望感に陥った彼女を、牧師は「まだいてくれたんだね」と心から喜び、おぼつかない手つきでお茶を入れてくれる。孤独な自分を受け入れてくれる牧師に、レイラはようやく心を許す。

しかし、なぜ手紙は突然来なくなったのか。レイラは郵便配達人に、明日は必ず手紙を持ってくるように頼むが…。謎を含んだままレイラと牧師の心の絆を紡ぐ糸車が静かに回り始める。

にこりともしないレイラと生けるキリストのようなヤコブ牧師の絶妙な取り合わせ。レイラ役のカーリナ・ハザードは、女優、ジャーナリスト、作家、翻訳家、メディア研究者でもあるという才人。レイラの強さ、硬さ、依怙地な物腰の底にある寂しさ、不安、悲しさを見事に演じて見せる。知らぬ間にレイラに寄り添う自分がいる。

『ヤコブへの手紙』

フィンランド映画（75分）／監督：クラウス・ハロ

銀座テアトルシネマほか全国順次公開